

ビッグター・トーマス (IV)

— リチャード・ライトと人種関係 —

安部大成

まえがき

1 ビッグター・トーマスの特徴とその構築過程

2 ビッグター・トーマス

- a. メアリー・ドルトンの死まで …… (途中まで第 26 卷第 1 号)
(a 続き) …… (第 27 卷第 1 号)
- a'. リチャード・ライトの影
- b. 捜査関係者との対決 …… (第 31 卷第 2・3 号)
- b'. ライトと南部黒人文化 …… (以上本号)

2 ビッグター・トーマス [承前]

b'. ライトと南部黒人文化

ライトは彼が創作活動の基本とするところを述べた評論『黒人作家の青写真』(以下『青写真』)(*New Challenge* 掲載, 1937)において, 黒人文化を概括し, 黒人作家の創作の方向を提示している。

彼はアメリカ黒人文化は主に 1) 黒人キリスト教会と 2) 黒人民間伝承の二つを源泉として成り立つと考える。

黒人信者とその聖職者が白人教会から排除されたことによって、黒人教会が成立するが、キリスト教は黒人奴隷が最初に接触し、吸収した一つの体系化されたヨーロッパ文化であった。

彼はこの宗教は奴隷制の一時期に奴隷の人権を擁護する方向で意義ある働きをしたが、大体は人種抑圧の苦痛と社会的拒絶に対処する精神的解毒剤の働きをしてきたに過ぎないと見ている。

これに対して民間伝承の伝統には、ブルース、霊歌、民話、父親が息子達に密かに伝える知恵、母親が娘達に小声で教える男達の事、少年達が街角で交わす異性を巡る体験談、灼熱の太陽の下で歌われる労働歌などが存在し、これらの経路を伝って黒人集団の生活と知恵が表現されていると考える¹⁾。

彼は、作家の使命は民間伝承の伝統を保持する黒人大衆のなかに身をおいて、この伝統を把握し、その限界を克服して、黒人全体の将来を展望する作品を生み出し、芸術を通して民衆と社会的に意思疎通を計り、その理想を実現するところにあると主張する。

民間伝承の伝統を大衆の文化とすれば、黒人キリスト教会を中心とする文化は中産階級のものとなろう。

ライトが二つに分けた黒人文化の源泉をその社会階層と白人社会との関係で見ると、それはフランクリン・フレイジアーが指摘するところの、奴隷制度下の 1) 白人農園主の大邸宅に勤めた家内奴隷の文化と 2) 農園主に雇われた白人現場監督の下で就労した農場奴隷の文化に帰着する。

ライトが黒人文化の源泉の一つとした黒人キリスト教会は、白人農園主の邸宅に奉公した黒人が、農園主の宗教生活にも召使として参加することになり、黒人用に設けられた席に着いて、白人教会の礼拝に列席したところから出発し²⁾、民間伝承の源泉は大農園の農業労働に従事した奴隷：農場の働き手の文化にさかのぼる。

農場の働き手には、信仰覚醒の野外集会を催して宣教したメソヂスト派

とバプティスト派の情的で素朴な救済原理が受け入れられ、その宗教生活を特徴付けることになる。彼等の宗教集会から黒人霊歌が誕生し、アフリカから新たに送り込まれた奴隷がアフリカの要素をその文化に加味することになる³⁾。

ここで注目したいのはこの二つの黒人集団と白人との接触の仕方である。

農場奴隷はその反乱、陰謀、逃亡を阻止しようとする白人社会の監視下であり、白人及び白人社会との接触は、多くの場合、現場監督、奴隷商人、逃亡奴隷捕獲人など、その社会の支配統制の末端に位置する白人との間に限られていたから、その関係は人間的ではなく人種的であり、かつまた敵対的であった。黒人達は防衛的である必要があり、当然のこと、集団の結束は強固なものになる。

彼等が日常的に対処する白人集団は強力であるから、これに対する敵意の多くは隠蔽され、巧妙なかたちを取った抵抗となって現われ、冷酷な現実を生き抜く能力を高く評価する文化が育つ。

ところが、

「すべての奴隷が常に白人の監視下にあったのに対して、邸宅の召使は絶えず主人側との身近な付き合いの下に暮らしていた。」⁴⁾

家内奴隷は白人農園主とその家族の生活領域に出入りし、この支配層の白人と親密な関係を持ち、言葉遣い、振舞い、教養、技能など、白人文化を吸収したばかりか、女性の場合、農園主との間に性関係が生じ、人種混交をもたらした。この混血黒人の間から職人層が形成され、また主人の計らいによって解放される者が多く、彼等は南北戦争前の自由黒人人口の基本部分となった⁵⁾。

農園主によって解放され、自由の身になった家内奴隷の他に、大農園制農業の繁栄が見られない地域では奴隷主の同意を得て、半ば自由身分の扱いの

下に、賃金労働に従事し、金を貯えて自らの自由を買い取った黒人も存在する。1860年、メリーランド州に8万3942人、ヴァージニア州に5万8042人の自由黒人がいたが、その多くは自由を買い取った黒人であった⁶⁾。

白人の黒人に対する対応を白人の社会階層を基に考えると、豊かな階層は人種支配の社会基盤を構成するのだが、政治と経済に直接関係しない社会生活の分野にあっては、この階層はその富の余裕によって、限られた範囲ではあるが、穏やかな人種関係を維持し得る傾向にある。そして、その穏やかな人種関係の中で、人間関係が成り立つことがしばしばある。

短編小説の分野でアメリカ文学界に黒人作家として最初に登場し、後年小説の分野で優れた作品を残したチャールズ・ワッデル・チェスナットがこの面での人種間の人間関係を描いて、人種問題解決の手掛かりを探ったことはよく知られている。

二十世紀に入って、黒人の大半が住む南部諸州において人種隔離制が揺るぎないものと化した時期、この人種抑圧を打開する上で、白人の協力が不可欠であると考えたW. E. ボガード・デュ・ボイスは白人を階層別に別けて次のように言った。

「今日、南部白人の黒人に対する態度でさえ、多くの人が考えるようには一様ではない。無知な白人は黒人を憎み、白人労働者は黒人との競争を恐れる。金儲けをする白人は黒人を労働者として使いたがっている。教育を受けた白人の一部は黒人の向上に脅威を覚える。その一方で、他の白人達は——通例それは奴隷主の息子達であるが——黒人の地位を高めたいと願っている。」⁷⁾

彼は人種関係を改善する上で、かつて家内奴隷との間に人間関係を成立させ、奴隷制の時期に自由黒人を誕生させた大農園主階級の子孫に人間尊重の精神的遺産の継承を見て、その提携相手としてこの階層に期待をかけたので

あった。

チェスナットもデュ・ボイスも黒人中産階級出身の作家として、社会的に有力な地位を占める階層の中の進歩的な白人の協力を得て、黒人に対する差別と偏見を緩和しようと試みたのであった。

ライトは『青写真』執筆当時とその前後の数年間、階級理論に依拠して人種問題の解決を展望していたから、比較的豊かな中産階級が生み出した、従来の黒人文学作品に見られる、その作家達の黒人及び白人社会に対する姿勢を嫌っていた。

彼はこの階級に属する作家達の作品を同じ評論の冒頭で次のように批判する。

「一般的に言えば、過去の黒人文学作品はアメリカ白人に物乞いする、随分行儀の良い黒人使節のように、身を低くした種類の小説、詩、戯曲に限られていた。」⁸⁾

彼によれば、この種の作品しか生まれえないのは、それがこの黒人として教養ある階級の業績を白人社会に示す一種の飾り物であり、また黒人に対して「公正であることを白人社会に懇願する」⁹⁾彼等の声を代弁したものに過ぎないからである。そこにはこの階級の指針とすべきものもまともには取り上げられず、黒人自身について、また黒人が必要とするものについて書かれることはまれであり、黒人の苦悩や願いが反映されることは滅多になかった¹⁰⁾。

道義的権威が衰退した黒人教会と指導力が優柔不断で身動き出来ない黒人中産階級に代わって、黒人作家が進んで黒人大衆の立場に立って、その使命を遂行すべきだと彼は言う。

彼の短編集『アンクル・トムの小屋』(1938) に収録された四つの作品には、彼の創作理論が反映されている。

ここには当時の南部における黒人差別と抑圧と、これに命をかけて抵抗し、解放を願う黒人男女の姿が描かれていて、黒人に対して「公正であることを懇願したり」、「白人に物乞い」したり、「身を低く」するところは全く無い。

この短編集は『ストーリー・マガジン』の懸賞に応募した500点を超える作品から選ばれ、賞金500ドルを得た作品集でもあるが、三人の選者、シンクレア・ルイス、ハーリー・シャーマン、ルイス・ガネットのうち、後者二人が推したとされる¹¹⁾。

ガネットはニューヨーク・ヘラルド・トゥリビューンで、この作品集を黒人の新世代の産物と評した。

『アンクル・トムは死んだ。』と黒人の新しい、物怖じしない世代は言う。『アンクル・トムの子供達』というタイトルはミシシッピ州ナチェズ生まれの肌の黒い息子、リチャード・ライトがこの好戦的な世代を描写した辛辣な作品集に付けたものである。……これらの作品のいずれにおいても、黒人は怒らせると後へは退かない。『俺たちは何もしていないのに殺されるが、戦って殺されることもあるさ』と、ぺこぺこするアンクル・トムのような黒人達の、その子供達や孫達は言うのだ。』¹²⁾

ライトは「新しい、物怖じしない」、「好戦的な世代」に黒人集団のなかにある民族主義的傾向を見たのであるが、この傾向をとらえる上で彼は次のような点に注意を払っている。

「黒人労働者や黒人中産階級の中には民族主義の意図が、数多く歪んだ形を取って存在している。だから、その広い社会的意味を見落としたり、これらの民族主義的傾向が持つ革命的意義を見落として、この人びとの生活を描写しようとする単純なリアリズムでは全黒人に対して甚だしい不正を

働くことになり、また自由を獲得する闘争において、得ることのできる筈の盟友を遠ざけること間違いなしである。」¹³⁾

作品集の最後に収められた「輝く明星」にはライトが幼少の頃、街の黒人達が誇らしげに語った白人暴徒に対する報復の話が形と性質を変えて取り入れられている。

元の話は、暴徒に夫を殺された黒人の女が復讐を誓い、散弾銃を敷布に包み、身を低くして暴徒のところへお願いにあがる。埋葬するために夫の死体を受けとることを許されると彼女は遺体の側に跪き祈りを捧げ、敷布を広げると見せかけて、銃を握るや居並ぶ暴徒目掛けてこれをぶっ飛ばし、四人を射殺、見事にその目的を果たしたというものである¹⁴⁾。

この種の話は人種隔離制の拘束とリンチ殺害の脅威の下に暮らした黒人達に自衛意識を喚起し、不法行為に対して報復する勇気を与えるものであったらしく、ライト自身、子供心に大いに感動したと言う。

この作品では、その地域の党組織を壊滅させようとする冷酷な保安官と彼が率いる凶暴な白人の団に捕らえられ、拷問され、瀕死の状態にあっても口を割らない黒人の息子の母親が、黨員に扮して彼女から他の黨員の名を聞き出していった白人の若者の口を未然に封じるために、拷問の現場に先回りして、息子の死体を受けとりに来たと思せかけてこの密告者の到着を待ち、これを射殺して任務を果たし、息子と共に凄惨ではあるが安堵の死を遂げることになっている。

この作品には黒人青年ジョニー・ボーイと若い白人女性黨員エヴァとの同志愛、彼の母とエヴァの、人種を越えた友愛が母と娘の間の愛のごとく描かれている。

『青写真』も、またこれに続く『アンクル・トムの小屋』と『息子』も、彼がアメリカ共産党に加わっていた時期のものであるから、そこには当然この

政党の階級理論が反映されている。

1934年、『ニュー・マスシズ』に載った彼の詩は典型的である。

「私は黒人である。私は黒い手が
革命の拳を握って、さしあげられるのを見る
白人労働者の白い拳と並んで、
……」¹⁵⁾

しかし、彼が白人の間に「盟友」たり得る人びとを期待したのは、彼の当時の階級理論に由来するだけではない。

南部育ちで、多くの白人から理不尽な扱いを受けながら、彼は少年の日

「良い白人もいるのだ、金もあり繊細な感情もある白人もいるのだと自分で自分に言い聞かせた。全体から言えば、白人達は悪い奴等だと感じていたが、自分には運よく例外が見つかるだろうと思っていた。」¹⁶⁾

彼がこのように考えることができたのはフレイジヤーが指摘した、白人農園主と黒人召使との人間的接触と混交によって強められた両人種間の人間関係がもたらした混血自由黒人層の成立とその子孫が果たした社会的役割が歴史の流れと共に黒人集団の中に、一種の期待感情として、何処かに存在するであろう「良い白人」のイメージを存続させているからであろう。

勿論「良い白人」のイメージは混血自由黒人の誕生によるだけではない。奴隷制の時期に北部には奴隷制に反対する白人が存在し、逃亡奴隷を援助する組織も存在し、仲間や身内の密かな協力を得て北部へ逃れる黒人奴隷も少なくなかったから、黒人の間には「良い白人」は現実に存在していた。

また奴隷解放の軍隊は北部からやって来たし、南部再建期には北部から政治や行政に関わる男性に混じって白人女性が黒人学校の教員としてやって

来た。

国内の統一を迫られ南部再建が政治的妥協として終結すると、黒人の処遇は南部に任される。軍事的敗北によって奴隷制と共に経済的繁栄も失い、人的損害を被った南部白人にとって黒人は容認し難い社会的存在であった。黒人は公民権を奪われ、人種隔離制の下に白人の下位に隷属するように強いられ、抑圧の下に生計を維持するなかで、白人支配の社会を生き抜く黒人特有の文化を発展させていった。

こうした人種的圧迫の中で、南部社会に「良い白人」の存在を願望的に期待する人びとが黒人の中に入るとすれば、それは個人的に「良い」ところがある白人を知った人か、その種の期待を抱けるような手掛かりを身内に持つ人であろう。そうでない場合、ライトも『ボーイ』で描いているように、民間伝承のかたちで語られる「自由の地、北部」とそこに住む南部白人とは異なった北部白人、あるいは実際北部から南部へ移って来た、南部人とは異なる北部人が、言わば「良い白人」に加えられるのであろう。

1960年代の中頃に高揚した、南部を中心に展開され人種隔離制廃止を実現させた公民権運動は両人種が暮らす地域社会を二極対立の状態に置いた。

白人作家ロバート・ペン・ウォレンは大衆動員と直接行動によるこの運動の指導分野にいた人びと、また黒人の意識変革に影響を及ぼした人びとを黒人の間に訪ねインタビューを行なっている。『人種平等会議』を創設し、組織を指導したジェイム・ファーマーと語るなかで、ウォレンは「南部の『良い』白人について」という一項を設けて意見を求めている。ファーマーは、白人と黒人の間で顔見知りの関係も生じる規模の小さな地方都市で発生した人種紛争を例に、黒人の考えを披露した。

「黒人は良い白人がいると考えていたものだ。ルイジアナ州プレイクマインのことを思うのだが、警察の大掛かりで冷酷な鎮圧があった後、黒人の

地域社会では『良い白人なんて死んだ白人だけだ』と言われたものだ。例えば、こんな風に言う人があるんですよ。『ねえ、ちょっと、あのジョンソン奥さんの息子さんがねえ、電気仕掛けの牛突き棒を持って騎馬隊にいたのに気が付いたかい？ あの人は良い白人だと何時もそう思っていたんだがねえ』

ブレイクマインで、白人と黒人とが人種別に完全に二派に分かれてしまってから黒人は、白人はみんな黒人に敵対しているのだと思っていたんです。そこで私は私の白人の秘書を数名そこへ送り込んだのです。それは旨くいきましたよ、微妙なかたちでね。——この白人達はそれぞれが一個人としてとうとう黒人社会に受け入れられたのです。——ある意味で白色人種というものから取り除かれて、黒色人種の中に取り入れられたわけです。一人の若い女性のことで黒人達がこんなことを言うのを耳にしたのです。『そりゃ、その通り、彼女は白人さ。でもねえ、あの人はこれまでのうちで一番黒い白人女性だよ』¹⁷⁾

このウォレンの問いに答えてファーマーが明らかにしたブレイクマイン黒人社会の白人観と、個人と人種集団に関する見方はライトの両人種に対する関係を検討する上で、大いに役立つ。

人種隔離制が黒人の集団行動によって崩されるなかで、白人の黒人に対する本心がはっきり表に現われて、「良い白人は死んだ白人」だと黒人社会が言う時代が来るのだが、そのよう社会変動の兆しも見えなかった時期のライトに戻ろう。

ライトは1927年北部の大都市シカゴに出てくるまでの19年間、南部のミシシッピ州、テネッシー州、アーカンソー州で暮らした。人種隔離制が生活に根を下ろした南部にあって、ミシシッピ州は奴隷制の時期を含めて、黒人に対する処遇が冷酷な州として悪名が高いところであり、彼は他の黒人

と同じく、職を求めて白人の間で賃仕事に従事し、差別と偏見の下で数多くの苦しい体験をした。

また彼の幼少期に父親が扶養義務を放棄し、母親の乏しい収入で暮らしを立てたが、母が病に倒れ、母方の親族、中でも叔母や叔父夫婦が同居する祖母の家で十代の初め頃から十七歳までの時期を送ったため、結束力の強さを特徴とする黒人家族、それは黒人を心底から白人の配下に置こうとする白人社会の圧迫を被るなかでその特徴が生まれたのだが、黒人親族内での拘束の多い人間関係に苦しんだ。

また当時、黒人は生活する上でほとんどの職を、敵対的な白人社会に求めざるを得なかったから、仕事の確保と自己防衛のために、白人に対して裏表のある行動、それは奴隷制の下で発達し、人種隔離制の下で新たな様相をおびるに至ったが、いわゆる二重行動が適切な行動様式となってその生活に定着していた。彼はこれに適應するのに困難を来し、災いを被ることが多かった。

これらの体験を彼は『ボーイ』に綴っている。

彼は黒人を白人の下位に置くのを当然とする南部の制度や生活習慣の中で、生計を維持するためにその仕事先で接した白人男女から理不尽な、時には冷酷に扱われるなかで、このように黒人を不当に扱わない白人が存在すると考えていたこと、また黒人の間に「良い白人」という白人像が存在することは既に述べた。

「良い白人」とは一般的意味で言えば、黒人を白人と同じ人間と考える白人、黒人に対して偏見を持たず、これを差別しない白人のことである。ライトとの関連で問題なのは、この「良い白人」なるものが、彼に取って持つ意味と役割である。

ライトの伝記を読んでいくと、黒人に対して尊大で、冷酷で、傲慢な白人を嫌い、恐れながら、そうでない白人の存在を想定し、これを求めていたことが分ってくる。

「良い白人」が存在するという思いを心のどこかにおいて、白人社会に職を求めて入っていく結果、黒人を白人の下位に属する人間であると考え、身を低くしない黒人を白人の地位を軽んじ、これを脅かす傲慢で許し難い存在と感じる白人の反感を呼び起こして、苦い体験を繰り返した。

ところが彼の仲間達はみんな白人のところで働いて、難なく臨時の収入を得ていたし、大人達は職を維持していた。

彼等は、差別し偏見を持つ白人に巧妙に対応して、相手の狭量な思い込みを満足させ、実質的利益を手に入れる演技力を生活様式の一つとして、黒人文化の中で自然に習得し、身に付けているからだ。この演技力に関しては、前項 b. 捜査関係者との対決において、白人社会に対処する黒人の「適応能力」として、ビッグーの演技を検討したところで述べておいた。

ライトは黒人文化の中に育ちながら、白人社会に対する「適応能力」を充分に習得していなかったと考えられる。このことは、彼が黒人集団と黒人文化の中に育ちながら、この集団と文化に馴染まない個人的な要因と社会的な要因があったと考えられる。

黒人を圧迫する白人支配の南部社会にあつて、心身ともに成長するにつれて、黒人集団と黒人文化を煩わしく思う気持ちと「良い白人」の存在を期待する気持ちが表裏一体となって強まっていく。

『ボーイ』をもとに、ライトの「良い白人」の追求を黒人文化と黒人集団との関係、特に白人に対する「適応能力」との関係で検討することにした。

ライトは人間の優劣が制度的に白人と黒人という人種の相違に色分けされた社会に育ったが、人種意識が希薄であった。それは教育や学習体験によるものではなく、彼がそこで養われた母方の親族が有する身体特徴に由来する。

彼が子供の頃を振り返って言うには、

「白人を『白い』人達だと感づく能力を習得するのが遅かったのは私の親戚の者の多くが『白人』のような顔形をしていたところに起因するのもかも知れない。私の祖母はどの『白人』にも劣らぬほど白い人だったが、私には『白い』などと思ったことはない。」¹⁸⁾

従って、

「私は街路で数え切れないほど白人の男女を見掛けたが、特に『白い』とも思えなかった。私には彼等はただ黒人と同じ人間であったのだが、誰一人としてこの人達と親密に接したことがなかったのが、ともかく変で、妙に思えたのだった。」¹⁹⁾

彼が「白人と黒人の関係について、初めてぶつかり、自分が知ったことでおびえてしまった」のは六歳か七歳の頃である。彼は黒人の子供が白人の大人に酷く殴られたという話を耳にする。彼は叩いて子供のしつけができるのはその親だけであると思込んでいた。白人なら、親のある黒人の子供を叩けるのが腑に落ちないので、母に問うと、しつけるために叩いたのでなく、ただ酷く殴り付けたのだと言われた。これが納得できないのでさらに問うと、これが分かるにはまだ早いと言われる。以来『『白い』人を見掛ける度に、これは一体どういう人間なのだろうか、じっと見つめるようになった。』²⁰⁾

この体験があつて以来、彼は白人を恐れるようになるが、それは無分別な性質のものではない。

彼は母に連れられて、父から養育費を取るために、裁判所へ行った時、高い所にいる白人の顔を見た。あれが裁判官だよと母に教えられた。

「裁判官が何か尋ねるかも知れないから、そうになったら本当のこと言わないといけないよと母が言った。」

「母が泣き、父が笑うのを座って見ているのが辛かったから日の照る路上に出ると嬉しかった。家に戻ると母はまた泣いて、父の言い分を聞くなんて、裁判官は公平じゃないと随分不平を言っていた。」²¹⁾

彼も母と同じく白人の裁判官を一人の人間として見ていたようだ。

彼が白人を見て恐ろしくなった最初の体験は、七歳の頃預けられた孤児院を逃げて白人警官に保護された時である。

「歩道の真ん中で泣いていた。『白人』の警官がやって来たので、殴られるのではないかと思った。彼はどうしたのだと尋ねた……その『白い』顔が新たな恐怖を胸に呼び起こした。『黒人』の子供を殴ったというあの『白人』の話の思い浮かべていた。……恐ろしくて泣き止んでしまった。」²²⁾

彼が白人を見て恐怖を覚えた時、彼は黒人を痛め付けると言われる「白い」顔形を見るだけであり、そこに人間を見ていない。ところが、迷子の身になったのであろうし、またそれが可能な情操の持主なのだろう、迷子に親密な情感をもって接する白人警官には、全く人種、あるいは人種の相違や恐怖を感じていない。彼は心を開いて、穏やかな人間に対面している。そこでは、大人の警官と迷子の間に人間関係が成り立っている。

口も利けないまま警察へ連れて行かれ、食べ物をもらって、「白人」の警官ばかりいるなかで椅子に座っていると、何時の間にか眠りに落ちてしまう。

やさしくゆすぶられて目を開けると側に別の警官が座っていたので、その「白い」顔をのぞき込んだ。この警官は「内緒ばなしでもするように、打ち

解けて、やさしい口調で、いろんなことを尋ねるものだから、うっかりしてこの警官が『白人』であるのを忘れてしまっていた。」そこで、孤児院を逃げて来たことなどすっかり話してしまった²³⁾。

このライトの白人に対する基本的対応が人種集団の構成分子に対するものではなく、一個人としての、つまり一人間としての対応であったが、この基本的対応は、それによって痛め付けられる、苦い体験を経ながらも、生涯変わることはなかった。

彼は家庭教育や学校教育では人間が平等であるなど、聞いたことがない。白人社会がその観念を黒人が抱かぬように統制していた。その統制下にあった黒人社会は、危険を避けてこの種のことは教えなかった。

彼は混血黒人の中でも白人に近い身体特徴をした親族の間で少年期を過ごしたから、白人も親族の人びとや自分と同じ人間であるとしか考えられない、言わば自然な人間に育ったのであろう。

彼は黒人を低く見る白人社会に反感も感じていたから、理不尽な考えを持つ人びとの困惑は自業自得で同情の余地はなかった。

「祖母と一緒に街に出て、白人の老女が間違いなく黒人の男の子を二人連れて、キャピタル大通の店を出たり入ったりするのに白人達が当惑の目を向けるのは好い気味だった。」²⁴⁾

しかし、八歳になる頃には、白人から黒人が差別され隔離されているという、動かし難い社会的事実を実際に知り、感覚的に二つの人種を意識するようになる。夫が酒場を営んでいる母の妹、マギー叔母を頼ってアーカンソー州イーレーンへ移るために駅へ行った時である。

「……切符を売る窓口には『白人』の列と『黒人』の列が、二つ出来てい

るのに初めて気が付いた。祖母の家に滞在した間に、死ぬまで消えることはあるまいと思われるほどはつきりと、具体的に、白人と黒人との二種の人種があるという感覚が生まれ出た。」²⁵⁾

そして、この人種隔離制の南部社会では白人が黒人の命を不当に奪えるほど黒人が無権利に等しい現実を身をもって体験する。

彼が母と弟と共に身を寄せた叔母の夫は心おおらかな、思いやりのある人であった。貧困生活と親戚の家に寄寓して、食べ物を欲しいだけ口に入れたことがなく、許可を得てはがつつ食べる甥を見て、ホプキンス叔父は「欲しいだけ食べさせてやって、食べ物に慣らしてやったらいい」と言う。

この叔父は勇敢な人で、彼が黒人労働者相手に経営する酒場の経営権を奪い取ろうとする白人グループの脅迫に屈しなかった。彼は自衛のためにピストルを枕元において眠り、これを身に付けて酒場へ出ていた。ライトはここに命懸けで生活権を守る黒人を目の当たりにしている。

ピストルを置き忘れて仕事場へ行った夜、彼は酒場で殺される。白人達はホプキンスの身内の者を皆殺にするといきまいて、と知らされて、近所の農夫の荷馬車に生活用具を積んで、夜の明けないうちに、西ヘリナへと逃げのびる。彼は白人の恐ろしさに動揺しながらも、何故報復しないのかと母に尋ねて、叩かれている。これが人種迫害を生き延びる上での無言の教育であった²⁶⁾。

ジャクソンの祖母のところでしばらく暮らして、一家は再び西ヘリナに戻る。マギー叔母さんにはマッシュューズ教授とかいう新たに夫になる人がいて、密かに訪ねて来ていた。二人は近いうちに北部に向かうことになっていた。どういうわけか、母に彼のことを口外してはならないと厳しく言われた。彼は白人に追われているのであった。ライトの心のどこかに潜んでいる白人恐怖感が新たな内容をもって彼を脅かす。

ある夜、マッシュューズがやって来て、マギー叔母をせき立てて旅支度をさせる。顔をおおって泣く叔母。母が緊張した面持ちでせっせとトランクにものを詰めている。こっそり耳を傾けているとマッシュューズは親しい女性 [これが裕福な白人女性であったことをライトは後になって知らされる。白人女性との関係が疑われていることを察知したマッシュューズが、先ず関係を絶つて、何とかこの深刻な事態に対処しようとするが、女性の方が応じないばかりか、関係を絶つたら、犯されたと訴え出ると言うのであった。ライトは『ボーイ』では、この叔父が何をしたのか遂に知ることはなかった、と述べているのは親族への配慮であろう²⁷⁾。] から金を奪い、殴り倒して気絶させ、家に放火して来たと言う。彼はピストルを手に、外の様子を窺っていた。やがて二人は密かに手配した馬車に乗って暗闇の中を逃れていった。

彼の母は翌朝、彼が見たり聞いたりしたことを忘れてしまうよう言い聞かせた。白人は、彼が知っていると思っただけで彼を殺してしまうというのであった。

「『でも、あの叔父さんは何をやったの?』

『おまえには言えないよ』

『誰かを殺したんだ』私はおずおずしながらも思い切って言ってみた。

『そんなことを言うのを人に聞かれたら、おまえ、殺されるわよ』と母は言った。

この言葉で事は決着した。決してこれを口にはしないと。二、三日して胸にきらきら光る星形の印を付け、腰に拳銃を下げた、背の高い一人の白人が家に来た。彼は母と長いこと話していたが、母が言うのを聞いたのはこれだけだった。

『あなたのお話が何のことなのか、私にはさっぱり分かりません。何でしたら、家の中を調べて下さってもかまいませんよ』

この背の高い白人は私と弟に目を向けたが何も言わなかった。』²⁸⁾

このイーレーンと西ヘリナでの体験で、ライトは白人の不当な要求に屈しない人、白人社会の黒人規制に挑戦する、大胆な人がいることを彼の親族の間に見た。しかも、その代償が死であることを実際に体験した。そして白人が支配する社会では、それが黒人居住地に暮らしていても、白人が越えてはならぬと定めた行為の境界線を越えれば、生命を失っても致し方がないということを、身震いしながら学んだのだった。

それだけではない。この人種抑圧の中を、殺されないように生きていくには、黒人は先ずは、白人に知られてはならない自分と身内の秘密を固く守って、知っていることを知りませんと、平然と言える能力が必要とされることを知ったのだ。

ライトはこれを母が、大柄な白人官憲の前で、一家と親族の生命を守るためにやって見せるのを目撃したのであった。

マギー叔母さんとマッシュューズが去って、生計を助けてくれる人を失うとライトは空腹を抱える日が多くなる。そこで彼はこの叔父が買ってくれたプードル犬を売ることにする。金は白人のところにあるから、彼は子犬を抱えて白人居住地域に入る。

彼のこの行為を見ると、彼が白人を「白人」として見るのではなく、人間として見ていることが分かる。このことは彼自身をも「黒人」としてでなく一人間と自然に意識していたと言える。勿論、人種感覚は人種隔離制の下での生活体験を経て強くはなっているが。

白人居住地域に入ったのは生まれて初めての体験だった。そこには広い清潔な道が走り大きな白い家があった。一軒一軒、ベルを鳴らして、歩き回った。顔を見てドアをばたんと閉める人や、裏口へ回れと言う人もあったが、そんなことは自尊心が許さなかった。こうして歩き回るうちに、遂に一軒、彼に対応してくれる家があった。

彼が後ほど「良い白人」の存在を期待するようになるのは、少年期の初期にあった親切だった警察官との出会いと、この白人宅の訪問体験が基になっているようである。

若い白人女性が戸口に出て来て、要件を聞いてくれる。彼が九歳くらいの少年だったからであろうが、この女性は『ボーイ』に描かれた白人女性の中で、最も打ち解けた態度で彼に接した人物である。

「……若い白人の女性が戸口に出て来ると微笑を浮かべた。

『何のようなの？』

『可愛い犬を買いませんか？』

『見せてごらん』

その人は犬を抱きかかえ、優しくなでたりキスしたりした。

『何と言う名前？』

『ベツィ』

『可愛いわね』とその人は言った。『幾ら欲しいの？』

『1ドルです』と答えた。

『ちょっと待っててね。1ドルあるか、見て来るから』

その人はベツィを抱いたまま家の中へ入っていった。私は玄関先で待ちながら白人の世界の清潔さと静けさに感嘆していた。なんと、すべてのものが整然としているのだろう！……」²⁹⁾

彼は既に人種感覚を身に付けていたから、整然として快適な白人の世界に感嘆すれば、これと対照的な黒人の世界が深刻な思いを誘発させる。それは進んで白人と黒人の関係を想起させる。黒人の命を奪い、その住家から追い払う白人もまたこの世界に住んでいる。彼は一人白人の居住地域にすることが急に恐ろしくなると同時に、可愛いベツィをここに置いて帰ることができなくなる。

「ドアが開いて、さっきの女の人が微笑しながら、まだベツィを抱えたまま出て来た。しかし、私の目には今ではその微笑が見えなかった。私の目は自分が生み出した恐怖に染まっていた。

『可愛くて仕方がないわ、この犬』とこの人は言った。『買おうと思うんだけど。今1ドルないのよ。97セントしかないの』³⁰⁾

彼は3セント足りないことを最大限に利用して、ベツィを取り戻す作戦に出る。彼はそれを意識はしていないが、これは一種の白人を出し抜く行為である。彼の心情が全く読めない白人女性は1ドル今直ぐ出さないと売らないと言う彼に腹を立て、商談はご破算になる。彼女の手から子犬を取り戻して、彼は白人の居住地から逃げるように戻って来る。

1918年、赤貧の中、母が脳溢血で倒れる。近隣の貧しい黒人たちが援助のために集まって来る。「相互扶助」の文化が生き生きと描かれている。

読み書きのできた彼は祖母に急を知らせる。祖母がミシシッピ州ジャクソンからやって来る。彼女が口述するところを彼が書き取り、全国に散らばっている祖母の八人の子供に、倒れた母とその小さい子供をジャクソンへ連れていくための送金を依頼する。金が届いて、救急車で母は駅へ運ばれ、担架で汽車に乗せられ四人は祖母の家に到達する。

「マギー叔母さんがデイトロイトからやって来て、看病と掃除を手伝ってくれた。……クリオー叔母さんがシカゴから来た。クラーク叔父さんはミシシッピ州グリーンウッドからやって来た。チャールズ叔父さんはアラバマ州モービルから、エディ叔母さんはアラバマ州ハンツヴィルから、トーマス叔父さんはミシシッピ州ヘーゼルハーストからやって来た。」³¹⁾

これは黒人家族及び親族間の結束が日頃から強く、緊急時には極めて効果

的な「相互扶助」システムとして働くことを示している。「相互扶助」を尊重する黒人文化は、歴史的に、人種抑圧から生じる政治、経済及び社会的困難から、家族とその個々の構成員を救済するために発展した価値ある文化である。

しかし、援助を受けつつも、独立した家族として貧困生活を送ることと、親族とは言え他人の家に身を寄せ、扶養されることには質的な相違がある。後者にあつては個人の自由意思が制約されることになるからである。

「家の中には何かが起こりそうな雰囲気があつて、『子供達をどうしたらよからうか?』とささやかれるのを耳にした。私は他人が——彼等が親族の者であれ他人であれ——私の運命を論議しているのを知って恐ろしくなった。」³²⁾

ライトの母は半身不随の身となつて、自分の力では祖母の家から出られなくなる。ライトの黒人文化と黒人集団に対する否定的な態度は、母をいたわりながら、この後7年暮らすことになった、その親族が頻繁に出入りする祖父母の下での、干渉多い家族生活に由来すると言つても過言ではない。

成長すると共に費用がかかるから、彼は友人や知人を頼つて臨時の職を見つけて働くことになる。黒人の保険屋の助手をして、随分いい収入を得たこともあつたが、それは例外である。職はすべて白人のところにあつたから、彼は「白人」との関係性を、彼等の求める状態に旨く維持することができず、嫌われたり、理不尽な制裁を受けたりして、せつかく得た仕事をたびたび失っている。

ある衣料品店の運搬人の仕事をしていた時、その息子に次のように言われ、仕事を失っている。

『おい、黒いの、こっちを向いてみろ』と彼はやり出した。

『はい、かしこまりました』

『お前、何を考えてるんだ？』

『何も考えてはおりません』私はあっけにとられた振りをしてしながら、彼をごまかしてやろうとした。

『お前は どうして他の黒ん坊みたいに、笑ったりしゃべったりしないんだ？』と彼は尋ねた。

『さあ、それはあまり笑ったりしゃべったりすることがないからでございまして』私は笑いながらそう言った。

当惑した彼の顔は堅かった。私は彼を納得させなかったことを知った。彼はくるっと背を向けて店の表に行き、顔を赤くして戻って来た。彼は数枚のドル紙幣を私の体に投げ付けた。

『黒っ、てめえのつらが気に食わん。さあ、出ていけ！』

私は金を拾ったが数えもしなかった。帽子を手に取って店を去った。』³³⁾

彼は白人の若者に、敬称を用いて応答している。身を低くして、対等な態度も全く取ってはいない。しかし、この若者には白人と対等の立場に立っている黒人としか感じられない。「てめえのつらが気に食わん」とはまさに的を射ている。ライトは白人を「白い」と思ったことがなく、白人も黒人と同じ人間だとしか考えられない血縁関係者達の中で育っていた。白人は彼の祖母と同じ肌と顔形をした、同じ人間なのだ。身を低くして、白人主人に対する黒人従者の役を演じて見せても、それは顔に現われるのだ。

彼は、宗教的に厳格で、窮屈で、他の親族も加わっての干渉の多い祖母の家を先ず出る計画であった。そこから母を連れ出すことにしていた。それには、金が必要だ。稼いで蓄えねばならない。

彼は友人から北部から来た白人が社長をしている眼鏡会社を紹介される。彼は翌日、事務所が開くずっと前に出かけて行って、心の準備をしていた。

「考えてから口を開くこと、行動する前に考えること、『はい、そうでございます。いいえ、そうではございません』と丁重に答えること、彼等白人と自分が対等であると考えているように思われぬように振舞うこと。」³⁴⁾

事務所の中へ通された彼は、次々に出勤してくる白人男女社員を観察している。彼に用件を尋ねて席につかせた若い白人社員のビジネスライクな態度が彼の気持ちをくつつがせた。

「最後に、背の高い、血色の良い白人が入って来て、私を一瞥して、机に向かって腰を下ろした。そのきびきびした態度がはっきりと、彼が北部白人であることを示していた。」³⁵⁾

彼は白人社会に入れば、先ずは一個人としての人間であることを忘れて、人種としての一黒人として、白人社会が規定する黒人の立場を守り、その役割を演じなければならないことは分っているのだが、人種的態度が見られない白人に接すると、彼は人間的に反応してしまう傾向がある。

ライトはこの「北部白人」クレーン氏に「良い白人」を直感したのだろう。この人はまさにそのような白人であった。

ライトと社員との間には彼が黒人使用人の立場に徹していたので快調に事は運んだが、工場の作業員が、黒人にレンズ磨きの技術を教えるという社長の方針を嫌って、ライトに言い掛かりをつけて恫喝し、痛め付ける。

クレーン氏はライトを保護すると言ってくれるのだが、身に危険を感じた彼は職を辞する。彼はこの時の心境を次のように述べている。

「私はキャピタル大通りを歩きながら、歩道も、私も、他の人々も、すべて実体のない、架空のもののような気がした……私は人間の仲間から叩き

出されてしまったような気がした。」³⁶⁾

彼には白人も黒人も先ずは人間なのであった。この苦い体験の中で彼は現実に「良い白人」の一人に出会った。それが彼に南部を去って北部に向かう決意をさせることになる。その資金を手するにはもはや尋常な手段に頼っていたのでは不可能であった。

この人種抑圧の世界で、黒人中学校を遅れて卒業した十七歳の黒人がまとまった金を手にするには、不法行為しかないことをライトは認識する。

彼は、白人が経営する黒人専用映画館の入場券の売上をごまかして利益を上げる組織犯罪に加わることになる。

ライトは組織仲間の役割分担で、入場券である札を受けとって通し番号順に保管する入場係の役を引き受ける。

『「……お前が正直にしたら、他の連中もそうせざるを得ないのだ。入場券はみんなお前の手を通る。お前が盗まない限り、盗みは成り立たないのだ』私は正直にすると彼に誓った。自分がやろうとしていることに全く何の良心のとがめも感じなかった。彼は白人である。彼と彼のような連中が私に加えたような仕打ちを彼に加えてやろうとしても、それは不可能だと思った。」³⁷⁾

彼は正直で、従順な黒人を演じ、組織の一員として機敏に、冷静に、巧妙に行動して、経営者を出し抜いて、その目的を達成し、3週間の仕事で合計150ドルの大金を手に入れている。

この組織が旨く機能するのは、そこに黒人文化が高い価値を置く「黒人に対する忠誠」が行動の規範として働くからである。

黒人に対する忠誠

「黒人は仲間の黒人と自己の違いがどのようなものであれ、共同の目的の下に結束して立ち向かわなければならない。白人は決して全面的には信頼し得るものではないし、黒人共同社会の親密な生活の領域には加えるべきではない。黒人に対する忠誠とは、簡単にいえば、それが正しかろうか間違っていようが、白人と対決している黒人は仲間として支援すべきである、ということだ。」³⁸⁾

彼は人種差別の地南部とその人種抑圧の中で発展した黒人の集団文化の地を抜け出すことになる。「良い白人」も存在するであろう北部へ向かって。

(つづく)

[注]

- 1) Richard Wright, "Blueprint for Negro Writing", Addison Gayle, JR. ed., *The Black Aesthetic* (Doubleday & Company, 1971), pp.335, 336.
- 2) E. Franklin Frazier, *Black Bourgeoisie* (Collier Books, 1962), p.17.
- 3) *Ibid.*, p.18.
- 4) *Ibid.*, p.17.
- 5) *Ibid.*, pp.17-19.
- 6) *Ibid.*, p.19.
- 7) W. E. Burghardt Du Bois, *The Souls of Black Folk*, (1903), A Fawcett Premier Book, 1961, p.52.
- 8) Wright, *op. cit.*, p.333.
- 9) *Ibid.*, p.334.
- 10) *Ibid.*
- 11) John M. Reilly, ed., *Richard Wright: The Critical Reception* (Burt Frankling & Co., Inc., 1978), p.1.
- 12) *Ibid.*, pp.1-2.
- 13) Wright, *op. cit.*, p.339.
- 14) Richard Wright, *Black Boy* (A Signet Book, 1968), p.83.
- 15) David Bakish, *Richard Wright* (Frederick Ungar Publishing Co., 1974), p.9.
- 16) Wright, *op. cit.*, p.163.

- 17) Robert Penn Warren, *Who Speaks for the Negro?* (Random House, 1965), p.201.
- 18) Wright, *op. cit.*, p.31.
- 19) 20) *Ibid.*, pp.30-31.
- 21) *Ibid.*, pp.34-35.
- 22) *Ibid.*, p.39.
- 23) *Ibid.*, pp.39-40.
- 24) *Ibid.*, p.54.
- 25) *Ibid.*, p.55.
- 26) *Ibid.*, pp.59, 62-63.
- 27) Constance Webb, *Richard Wright* (G. P. Putnam's Sons, 1968), pp.40-41.
- 28) Wright, *op. cit.*, p.78.
- 29) 30) *Ibid.*, p.79.
- 31) *Ibid.*, p.97.
- 32) *Ibid.*, pp.97-98.
- 33) *Ibid.*, p.201.
- 34) *Ibid.*, p.205.
- 35) *Ibid.*, p.206.
- 36) *Ibid.*, p.210.
- 37) *Ibid.*, pp.222-223.
- 38) Robert Staples, *Introduction to Black Sociology* (McGraw-Hill Book Company, 1976), p.77.